

## 消費者センターがアドバイス

### 軽く「契約」しないで！

#### 消費者注意報「あなたもターゲット！」

学生相談室では、大学生が巻き込まれやすい架空請求トラブルやキャッチセールスなどの悪質商法を未然に防ぐための講演会を7月13日、生田キャンパスで開いた。

講師は川崎市北部消費者センター相談員の吉川真沙美さん。はじめに「契約」とは売り手と買い手がすべての内容に合意した約束であり、解約は困難であるということを理解すべきだと指摘。契約書を確認することの大切さ、知っていれば防げる被害について事例を交えて説明。最近、大学生に広がるマルチ商法が問題になっている中、トラブルに遭ってしまった場合には、一人で抱え込まずに誰かに相談してみよう、と訴えた。

吉川さんは「当センターに専大生からの相談が多いので、この機会にぜひお話しさせてほしいと志願して来ました。契約の際には本当に必要なかを冷静に考えること。クーリング・オフや未成年者取り消し、消費者契約法を理解し、自衛しましょう」と、正しい知識と冷静な対応の大切さを指摘した。

## ネットワーク情報学部プロジェクト

### 外部展示会に初出展

産学連携の足がかりに

川崎市高津区のかながわサイエンスパーク(KSP)で7月12日から14日まで開催された第19回先端技術見本市「テクノトランスフェア in かわさき2006」に、川崎市産業振興財団の要請でネットワーク情報学部と情報科学研究所(綿貫理明所長)が共同で出展した。

出展したのは「3E MUSIC SERCH—音楽コンテンツの次世代検索手法—」「はにわにわとり～会話するコンピュータ～」情報による意思の選択」「Smoodia—情報に触れるデザイン—」の4プロジェクト。例えば「Smoodia」は情報機器の扱いが不慣れな人でも、「カンタン」かつ「楽しい」操作で、情報に触れ、コミュニティを作ることができる。「プロジェクト」は複数人がチームを作り、企画した情報システムを1年間かけて計画・設計・実装する学部の「看板科目」。学内デモ会や学外発表会「コウサ展」で鍛えた学生たちの見事なプレゼンテーションがIT系のベンチャー企業の注目を集め、今後の産学連携の発展の足がかりとなる初の学外出展となった。



▲7月13日に説明を担当した4人

## キャリアデザインセンター 新たなインターンシップの形に —

### 経営学部2ゼミ「納豆」新商品開発の提案

#### 「地域密着型」

キャリアデザインセンターが募集した「地域密着型」インターンシップとして、経営学部の池本正純ゼミと高柳美香ゼミが、川崎市麻生区にある納豆メーカー(株)カジノヤの冬季新商品開発にチャレンジ、7月28日には、同社の経営幹部を招いて、プレゼンテーションを行った。

このインターンシップは、新たな産学連携の形を目指している川崎市産業振興部の仲介で実現したもの。両ゼミとも学生へのアンケート調査、実際に工場で納豆の製造工程の見学を行い、若い世代にアピールする各3種類のタレのレシピ、パッケージデザインを提案した。

池本ゼミは、美容と健康に効果がある納豆に、デザートとしての可能性を見だし、「あんこダレ」を考案。パンに生クリームを載せたものとあわせ、試食してもらった。「『あんこ』との相性がいいことに驚いた。毎日食べているがこういった斬新な発想はなかった」と学生ならではの感覚に同社の幹部たちからは絶賛の声があがった(ほかにピリ辛ねぎ味噌ダレと白胡麻ダレを考案)。

高柳ゼミは、大学生の納豆に対する現状把握を行った。食べる頻度、イメージ、納豆に入れたいもの、入れたくないものを調査し、さまざまな観点から考察を行った結果、「ごま油と韓国のり」「とろろ」「カレー」味を考えた。さらにコンビニでの販売強化や、ノベルティの利用、キャッチコピーの活用で若い世代の購入を増やす方法を提案した。

同社では今後、提案のあった全種類を試作し、さらに両ゼミとの意見交換をしながら、新商品販売に向けて企画を進めていきたいとしている。

池本キャリアデザインセンター長は、「地域の課題を解決するプログラムは、学生たちの潜在能力を発揮するチャンス。今後どう展開していくか、楽しみにしている」と話している。



▲池本ゼミの発表



▲高柳ゼミの発表

## サークルピックアップ — 落語研究会

### 笑いの場求め 学外でも活動

落語研究会(部員数23人)は、黒門祭・鳳祭以外に、自主的に学外での寄席を開催しています。昨年度は、10月と11月に多摩区のお年寄り向け施設、1月に鶴巻温泉の弘法の里湯、2月に川崎大師のプラザ大師=写真=に出演させていただきました。落語のほか、漫才やコントもやらせていただいています。

長生きには、「笑い」が最良の特効薬。私たちは日々、表現の場を求めていますので、このような形で喜んでいただけると幸いです。

若い、フレッシュな落語をお届けできると思います。都合が合えば、いつでもご依頼を受け付けています。(代表=江尻 浩史・経営3)



## 《New Ground- 新しい見方&lt;4&gt;》

## 夏はセミナーハウスで

飯泉 直之(商3・ジャーナリズム研究会)

夏休みに入ってまで、うだるような暑さの中でゼミだったり、サークル活動だったりといった至極当たり前なことに積極的になるのは、現代を生きる「もやしっ子」とも言える我々学生にとっては、苦痛でしかない。最高気温に反比例して、やる気は急下降する。少なくとも私はそうだ。大学へ行くために「山」をハイキングしたり、わざわざ200円払ってまでバスに乗ったりするなんてまったくもってうんざりだ。それはきっと、皆も同じことだろう。そう確信している。



▲山中湖セミナーハウス

だからこそ、セミナーハウスに行く。行くべきだ。セミナーハウスとはつまるところ、「学生のための合宿用宿舎」である。120年以上の歴史を持つ専修大学では、軽井沢や山中湖といったバブル期の豪華別荘地といったイメージがわく避暑地に建物を持っている。人気のある所は、学生の応募が多数になるため、抽選となってしまうこともしばしばある。値段も比較的安く設定されていて、私たちにとっては大きな魅力だ。

合宿では、勉強を試みたり、バーベキューをしたり(ただし、お酒は20歳から。これ、絶対)、部屋に引きこもってゲームをしたり、ふだん交流の少ない人と仲良くなったり、あわよくば甘いひと夏のアドベンチャーを…なんて現実感のない夢を見てみたり。普段の生活では味わえない、いろいろな体験が待っていることだろう。

猛暑の夏をバイトか無気力に毎日を過ごすだけの人や、ヒートアイランド現象の過熱する都会のコンクリートジャングルに嫌気がさしている人、鳴りやまない蝉の声に頭痛がする地方の人、ゼミやサークルでセミナーハウスへと合宿に行くことも計画してみてもはどうだろうか。在学生がいれば、その家族も使うことができる。